

NO MORE HIROSHIMA

廣島原子爆彈の手記

絶後の記

廣島文理科大学助教授

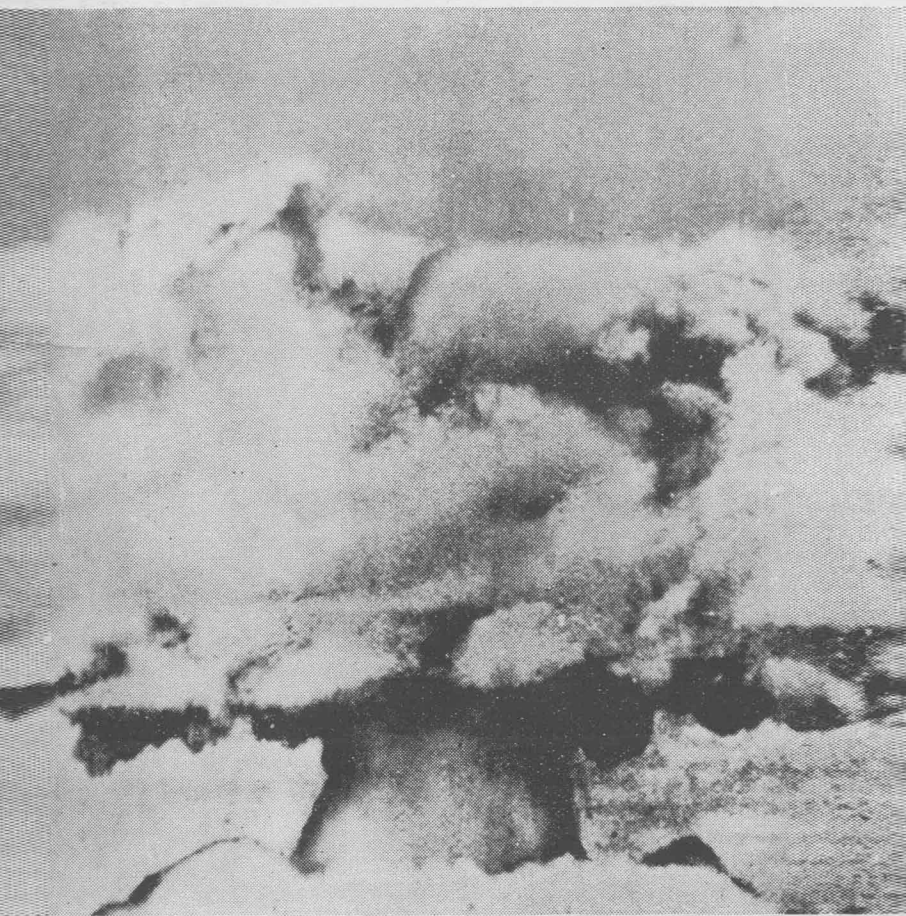
小倉豊文著



絶後の記録

— 亡き妻への手紙 —

小 倉 豊 文



中 央 社 刊

昭和二十三年十一月廿五日印刷
昭和二十三年十一月三十日發行

廣島原子爆彈の手記

絶後の記録

定價百五十圓

著者 小倉 豐文

發行者 澤本 嘉郎
東京都澁谷區穩田三丁目八十七番地

印刷所 塚田印刷所
東京都千代田區神田神保町三ノ二三

塚田十五郎

東京都澁谷區穩田三丁目八十七番地(神宮橋際)

(發行所) 株式會社 中央社

振替東京四五〇八七番
電話赤坂(48)〇八五二番

は し が き

「われわれが原子エネルギーを解放する。原子エネルギーを解放するは、自然力に關する人類の理解に新しい時代を導入するものである」——こゝに入るものである」八、統領が、一九四五年八月六日、廣島に原子爆彈が投下されて十六時間後、世界下されて十六時間後の一節である。と同時に、「原子力時代」というながい人類の想像の世界が、ながい人類の想像の世である。そして八月六日の廣島の代」こそ、この宣言にもあるように、「日の宣言にもあるようにまぬがれしめるため」に、七月二十六最後ツダムの最後通牒を、日本の戦争指最後通牒を、日本の電接の結果だつたのである。人類は、特に、こゝ本國民は、この事實を忘れてはならない。

爆彈くて原子爆彈は、現代人類最大の課題となり、その廣島への一發は、全人類に、特に日本國民に、反省な回顧と反省を要求している。

原子は廣島の原子爆彈體驗者の一人であつて、その後廣島の廢墟の中に再び生きて、今日に至つた者の敗る。日本の敗戦にはさしたる動搖も感じなかつたが、その後の混亂の中に、正しく生きんがため

の現實の生活設計には、内外公私ともに、かなりの努力を余儀なくされた。その間の日記を、私は「亡き妻への手紙」として書き綴つていた。當時の私にとつては、そうすることが生きるための唯一の力であり、燈火であつたのである。そして、時と心の餘裕を見つけでは、別に、原子爆彈落下の八月六日から二週間のブランクになつていた日記を補いつつ、原子爆彈の體驗と見聞を回想し、敗戦後約一年間の世相の動きを反省して、それを同じ形の「手記」にしていた。

たまたま、中央社から原子爆彈體驗記の執筆をすすめられた。私としては一應専門外の仕事なのでかなり迷つたのであるが、そうしたものの必要性は十二分に考えていたので、この「手記」の公表を決意したのである。だが「手記」はあくまで「私」の手記であつて、公のルポルタージュではない。殊に夫婦間の秘録でもあり、執筆當時から二年も経ているので、公刊するにあつては、個々の事實を全體的な眞實たらしめるために、相當程度の變形と、最少限度の取捨をあえてしなければならなかつた。書中の人名のあるものを變名乃至ABC……にしたのはその一つである。しかしこの變形は、本書の眞實性を少しも傷けるものではない。何故ならば原子爆彈の體驗は、書中に現われる特定的人物の専有物ではなく、當時廣島にいた人間全體のものだからである。

かれこれの結果から、本書が日本の一民間人の體驗と見聞による、廣島原子爆彈のルポルタージュ

としての役目は、一應果しうると思うし、同時に側面からは、終戦前後の一年間を廣島に生きていた一知識人の自畫像として、またその亡き妻の素描畫として、ひいては敗戦日本の懺悔錄として、讀みとつていただければ幸である。

なお本書が、廣島原子爆彈の回想であり、それはいきおい敗戦前後の日本の歴史でもある關係上、現實の平和日本の常識とはかけはなれた、あと味のよくない戰時的用語もしばしば使わなければならなかつた。これは本書の性質上、過去の誤つた概念の標本として、反省を新にするよすがとして、御諒承を願いたいと思う。

今日は、あの世紀の一瞬から數えて、滿三周年の日である。爆心地慈仙寺鼻の平和塔前では、第三回戰災者供養と第二回平和祭が行われた。そしてアメリカに起つた平和運動「ノー・モア・ヒロシマズ」の日本最初の聲があげられ、マッカーサー元帥のメッセージも發表せられた。このゆかりの日に、この「はしがき」のペンをとつた私の感慨は、ひとしお深いものがある。

一九四八・八・六

廣島の假寓にて

著

者

目次

はしがき	一
第一信 雲と光のページェント	一〇
第二信 爆風と熱波	二七
第三信 原子爆弾	四〇
第四信 焦熱の死都	五九
第五信 母子敍情	八一
第六信 妻子を探して	一〇五

第七信 めぐりあい……………一三三

第八信 八月八日……………一四六

第九信 爆心地……………一六三

第十信 「軍都」の最期……………一八〇

第十一信 原子爆弾症……………一九九

第十二信 残された恐怖……………二一九

第十三信 考える人……………二三四

広島原爆情況圖……………六



廣島原爆情况図



地名等は当時の名称による

○は焼失区域を示す

円周は爆心よりの距離を示す

×地点は書中の事件参照の事

向井潤吉畫伯

絶後の記録

— 広島原子爆弾の手記 —

小倉 豊 文

第一信 雲と光のページェント

「ピカツと、とても巨^{おお}きな稻^{いな}妻^{すま}が光つたと思つたの、それから、なんにもわからなくなつちやつたの、福屋の前で——」

文子——

八月七日の夜、奇蹟的にまだ生きているお前とめぐりあつた時、お前はとぎれとぎれにそういつたね。その八月六日の朝、お前が八丁堀の福屋の前に立つていた頃、俺は偶然^{むかし}向洋^{むかいや}のあたりを廣島の方に向つて歩いてゐた。

實によく晴れ渡つて、廣島特有の風の無いむし暑い朝だつたね。空いつばいに眞夏の朝の光線があふれるように流れて、少しもやもやしている紺碧^{こんぺき}の深い虚空^{こくう}は、チカチカ目に痛い程だつた。警報解除になつて三十分、あるいは一時間程もたつていたらうか。俺は乾き切つてほこりつぽいアスファルトの上をぼんやり歩いてゐた。

そして、大洲橋のたもとにきて、ちよつと足をとめて、海の沖合のキラキラ光る波の色に目を轉じ
たせつな、だしぬけにパツとマグネシウムのような青白い光、しかもものすごく巨大な、空をきるよ
うな鋭い閃光を、右手——廣島の上空あたり（と、とつさの間に思つた）に感じた。瞬間、俺は無意
識にバタツと太地にからだを伏せた。

ちよつと息をこらしていたが、すぐ頭をもたげて廣島の上空を見ると、さつき見たばかりの紺碧の
西空に脚のない入道雲のような巨大な白い雲の塊、あるいは煙か、何れにしても突如瞬間の出現だ。
そして、雨もよいの空の月の暈に似た光の輪が、キラキラ光つて周邊に虹のようにひろがる。白い雲
の塊は中心に向つて巻きこむように渦まきながら、横にぐんぐん擴大する。

次の瞬間、その下方一帯にものすごい巨きな雲の山、紅蓮の焰の大火柱、「空中火山」の大噴煙、
何と表現してもこの俺には全く形容を絶した大入道雲が、またしてもムクムクムクムクわきあがる。
下から下から上へ上へと盛りあがる。グングングングンわきあがり盛りあがつて、その容積を青空に
喰いこませる。やがてその頂のあたりが、夕立雲の崩れるようにひろがつて横に漠々とたなびく。は
じめの雲塊はその上に太い龍巻のような足を垂れさせて、まるで巨大な松茸のオバケのよう。そして
見る見る上下二段の擴がりをもつた妖雲の巨柱になった。その根はたしかに地上に接している。しか

も形は刻々に動いて、色も千變萬化する。あちこちからは何十とない小閃光の爆發だ。

古代印度の宇宙構造の想像圖、地上八萬四千由旬という須彌山大千世界の出現、俺はとつさにそう思つた。だが、かつて見たいいくつかの「須彌山圖」を想起して見ても駄目だ。舊約聖書のモーゼが見たという雲の柱も空想して見たが駄目。古代人の素朴な構想や幻想は、この「二十世紀の神話」世界の新しい突如の出現を解説するのに何の役にもたたない。まさに大空いっぱいを舞臺にした雲と光の一大ページェントだ。

しばし俺は、茫然自失恍惚こうこつとしていた。だが、「戦争」という意識が間もなく目をさましてきた。俺は大いそぎで俺の「空襲知識」の「おもちゃ箱」をひっくりかえした。

——この白晝に照明彈でもあるまい。

——焼夷彈しょうぎだんでもない、爆彈でもない。

——第一、飛行機が見えないじゃないか。

——しかし、あの光は？ 雲は？……

——……

——「殺人光線！」

俺はこの言葉につきあつたせつな、電流がジーンと頭の先から足の先までつつ走るように感じた。だが「殺人光線」の俺の知識は、ただ一つの「單語」にすぎぬ。不安が爆發するようにこみあげてきた。

俺はあわてて腕時計を見た。八時十五分を少しまわっている。

その時だ。

ドーンという鈍い、しかし巨きな轟音。同時に息の根を一舉にとめられたような猛烈な風壓、たしかに爆風だ。

俺は、ねたままの姿勢でじつとしていた。轟音と爆風と同時に「ガラガラッ」「ガチャーン」「メリメリッ」「ピシャン」といつたような、猛烈な突風に家屋や建具や家財道具などが、一瞬に破壊して吹きとばされる時のようなものすごい雑音をきいたような氣もする。帛をさくような人間の悲鳴もきいたような氣がする。だが、それらすべては、あとからの目撃と想像が、いつの間にか當時の「記憶」に潜入して定着してしまつたのかも知れない。

だが、「何だ!」「どうしたッ」というような聲はたしかにきいた。そして家の中からつぎつぎに街路にとびだす人間の影を見た。俺はもういつの間にか立ちあがつて周囲を見まわしていた。その時

の俺の目には、つぶれた家も見當らなかつた。火も煙も見えなかつた。見えたのは街路にとびだす人の影ばかり。ちようど、俺の立つていた大洲橋のたもとから、街道は一直線に廣島市内に向つて走っている。そして橋の前後はしばらくの間人家がまばらだ。だから木の枝から振り落された蟻ありのように、兩側の家からとびだす人影がよく見えた。

俺はまた考えはじめた。

——轟音と爆風……………

——閃光と噴煙……………

俺の脳裡のうりには電光のように、やや古い記憶の斷片がとびだしてきた。

——火藥庫の爆發！

これだ。何年前か忘れたが、大阪の枚方ひらたと京都の宇治のそれを思いだした。

——火藥庫の爆發！

——きつとそうだ。

——それにしても、西練兵場のあたりじやないか？

お前も知つていた通り、あの頃の廣島は人間と物資ばかりじやない、建物の疎開すらが大規模に急